
ダルク

原田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダルク

【Nコード】

N0470D

【作者名】

原田

【あらすじ】

一人の少女が産まれた意味は過去に起こった都市伝説に隠されていた。そしてこれからの少女の人生を左右する者、それは…

始まり（前書き）

この物語はオリジナル小説でありフィクションです。物語に出る団体や人物は実在しません。

始まり

今から約15年前

この世界には奇妙な噂が耐えず広がっていた

暗い月が出る夜

何ものかに殺される若者達それは決まって首の肉の一部が引きちぎられていた

中には半分以上も無くなっている人も居た

そしてまた 被害者が…

くダルクく

雲ひとつもない綺麗な夜空空に浮かぶ丸い月の下
一人の男が居た

男

「はあはあはあ…」

その男は息を切らしながら必死に走っていた
そう 何かから逃げているかのように…

男

「……………」

男が強ばった顔をして立ち止まる

男

「何だよお前は…アイツらを殺ったのもお前なんだろ!？」

寒い冬の季節

木枯らしが吹き荒れる中 男の目の前に立つ黒い影
全身を黒い毛皮のマントのような服をまとい長い髪が風に吹き上げ
られていた

その女の目は闇夜に獲物を狩る猫のように鋭く黄色い目をしていた

女

「恨みあるべき者…その恨み…今晴らす」

女に付き添うように大きな猫がうなり声をあげながら男に近づく
大きな猫が口を開いた

猫

「人間共…我の恨みを死して味わえ」

男

「お前があの…」

猫が男に向かって飛び付いてきた

男

「うわああああ！！！！！！」

ブチッ！！！！

猫は男の首の肉を引きちぎった 男はその場で息耐え男の首の肉を
猫は美味そうに食べた

女

「恨み…お前だけの肉だけじゃ物足りない…」

女は後ろを振り返りそのまま姿を消した

次の日の朝

新聞を手にしソファに横たわる男 清一郎

清一郎

「まったくマスコミも飽きない奴だねえ…これも姉さんのせいだよ？」
カウンターに女が一人

食事を持って近づいてきた女の名は美奈子清一郎の義理の姉 二人は両親がおらず父親の友達の娘 美奈子と二人暮らし

美奈子

「仕方ないじゃん？悪いのはアイツらだし」

清一郎

「でもこのまま大きくなってくると姉さん危ないよ？」

美奈子

「関係ないじゃん？それより大きくなった方が恨み晴らせるじゃないの二度とあんな事が起きなくなるし」

昨夜の大きな猫は人間に虐待され殺された恨みの固まりでありその猫の事と呼んでいた

美奈子は以前その猫に助けられており恩返しにとブラックキャットを体に宿し動物を虐待する人を殺しているのであった

清一郎

「いくらその猫の恨みだとしても姉さんが手を汚す必要ないじゃん

？」

美奈子

「うるさいわねえ…あんた殺すよ？」

美奈子がギロリと清一郎を睨んだ

清一郎

「さてと！！俺はもう行かないと…」

清一郎は美奈子の脅しに動じず平然な顔をして立ち上がった

美奈子

「まだあんなのとつるんでるの？いい加減よしなさいよ」

清一郎

「別にいいだろ？昔からの仲なんだしさ」

美奈子

「私にあんな男　大嫌いよ！！」

清一郎

「ハハハ」

清一郎は美奈子を後にして部屋から出ていった

始まり2

大きなビルの中に清一郎が入って行った

カンカンカン

鉄でできた階段を上がる清一郎は13階で止まり部屋に入って行った
部屋の中ではなにやら会議をしているようだった

長谷川

「よ!!!清一郎」

この清一郎が所属している長谷川グループの長
背丈は清一郎と同じで少し頑丈そうな体系 清一郎の幼なじみ

長谷川

「また仲間が殺されたぜ?」

清一郎

「知ってるよ」

長谷川

「ったく俺らに何の恨みがあるんだか…」

清一郎

「さあね…」

長谷川

「お前も少しは協力しろよ?このままだと皆殺しだぜ」

清一郎は知らんぷりをして長谷川の隣に座り雑誌を読み始めた

長谷川

「お前は相変わらずマイペースだな」

長谷川は立ち上がった

長谷川

「いいかお前ら！！今のままじゃ全員殺されてしまう 正体不明の猫ごときに怯えてる俺らじゃない＝奴は月がでる夜に現われるそこを俺らでやつつけてやるうぜ！？」

部屋に居た大勢の人が歓声を上げ場内は盛り上がっていた

清一郎

「俺は下りるぜ」

長谷川

「何？」

清一郎

「今日は早く帰ってゆっくりしたいの」

長谷川

「嘘付け どうせ女の所に行くんだろ？それよりさあ……」

長谷川は清一郎の肩を叩く

長谷川

「美奈子を連れて来てくんねえかな？アイツ俺の事拒否ってんだよな……」

清一郎は長谷川の手を肩から払うようにしてどけた

清一郎

「無理だね　ここ来る前にも言ってたよ？お前なんか大嫌いだって」

長谷川

「素直じゃねえなあ会いたいならそう言えがいいのに　まったく…」

清一郎

「姉さんが意地っ張りなのは昔っからだよ」

長谷川

「まあそこも可愛くていいんだけどな　笑」

その頃美奈子は口笛を吹きながら部屋を片付けていた

猫

「えらいご機嫌だな」

美奈子の背後から全身黒く普通の猫よりはるかに大きい猫が出てきた

美奈子

「なあに？ダルク　羨ましいの？」

ダルク

「私はあの男が昔から大嫌いだな…殺したくてうずうずしているのだよ」

美奈子

「駄目よ　いくら人間嫌いなダルクでも殺していい人と駄目な人くらい見分けつくでしょ？」

ダルク

「…美奈子　お前はあの男の何処がいいんだ？私には臭くてたまらん」

美奈子

「何時かきつとあの人の良いところ分かるわ」

美奈子は手を止め　時計を見た

美奈子

「もうこんな時間」

ダルク

「なあ…リユータ」

ダルクの頭の上から全身真っ赤な小さな猫がひょこつと顔を出した

ダルク

「お前はあの男どう思う？」

リユータ

「僕う？僕わあそだなあ…筋肉もぎ取ってやりたいな」

ダルク

「お前も私と同じ意見のようだな」

美奈子

「もう！！二匹ともいい加減にしてよね」

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴った

美奈子

「誰!？」

清一郎

「姉さあん＝俺だよお＝開けてくれよお……」

美奈子

「なあんだ…清ちゃん　今開けるね」

美奈子は玄関に行き鍵を開けた

清一郎

「何で鍵掛けるんだよ　俺が居る事忘れた？」

美奈子

「ごめんごめん!! ダルクと話してたからさ　ほら誰かに見られたらやばいじゃん？」

清一郎はダルクに近づく　清一郎と並んで見るとダルクは一回り大きいようだ

清一郎

「よ　久しぶりだな」

ダルク

「元気にしてたか？小僧」

リユータ

「僕も居るう」

リユータはダルクの頭から清一郎の頭へと飛び移った

清一郎

「おっ チビ助 相変わらず小せえなあ」

清一郎は愛用のソファに座り新聞を広げた

清一郎

「昨夜 また殺ったようだな」

ダルク

「死んで当然の男だ」

清一郎

「飽きないねえ…そんなに人の肉喰ってどうすんだよ？」

ダルク

「意味はない 人間の肉が好物なだけだ」

清一郎

「だったら丸呑みすりゃいいじゃん？わざわざ首の肉だけ喰わなくても…」

ダルク

「怨念なんだよ みんな私の腹の中で言っただアイツの首を喰ってやりたいってな 私はそれを叶えてやってるだけだ」

清一郎

「なあ……ダルク お前の腹の中にあと何匹居るんだ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0470d/>

ダルク

2011年1月25日04時13分発行